１：流れとセリフの確定

２：流れの確定セリフ変更あり

３：流れもセリフも未確定

２、ナレーションor CとDの会話から始まり回想スタート

草影に隠れながら作戦説明

１、アネキ「いいかまず私が足元に攻撃を仕掛ける。襲ってきたらラフィーがガード、ガードしてる間に私が上から攻撃、最後にラフィーがブッ叩くいいね」

１、弟「…うんでもそんな簡単にいくかな？」

１、アネキ「大丈夫私をを信じなって、そんじゃいくぜ」

１、二人とも草影から出る

↓

１、アネキが足元を攻撃

↓

１、モンスターが反撃

↓

１、アネキが弟の背後に回り込みモンスターの攻撃をガード

↓

１、アネキが上からジャンプして追撃でモンスターがひるむ

↓

１、アネキ「いけ！弟！」

１、ここで一瞬過去のトラウマの絵を出す。

１、飛び込んで決めると思いきや、弟の中でトラウマな過去が思い出し攻撃を途中で止めた。

１、少し悔しそうな顔をして アネキ『まだきつかったか』

１、モンスターがしっぽで攻撃しようとする

１、動けない弟を無理やり後ろに引っ張って

１、アネキ「いったん引いて！」

１、弟は下がって盾でガード構えをしながら震える。

その間にモンスターを倒すアネキ ここはほぼSEのみ

１、安堵の様子でアネキ「ふぅ～ 終わったわ」

空を見上げる等のカットを入れる

１、アネキ「いやーしかしそこそこいいやつ狩れたわ。これなら2,3日は大丈夫そうね。けどこれじゃあデカすぎて持ち運べないわねぇ。そうだ玄田（運び屋）にでも連絡とるか。」

１、弟『僕は弟とあるトラウマがあっていつも助けられてばかりなんだ、この人はアネキ 僕の幼なじみで小回りが利く僕の中では一流ハンター』

回想

流、弟『巨大モンスターに町を破壊されて明け暮れる中、僕を拾ってくれたんだ』

回想が終わった後。アネキがスマホ見たいな端末を使って連絡する。

流、弟『実際は政府ともめて仲間がいないから仲間にしただけみたいだけど…ああでもアネキは大事だと思ってる。かけがえのない存在だと思ってるでも…』

１、アネキ「よし連絡完了。おい弟！……？」

流、弟『僕は本当に必要とされているのだろうか？』

弟の顔の前で声をかけるアネキ

１、アネキ「おーい。き・こ・え・て・る・か？」

１、弟「えっ何？」びっくりした顔

１、アネキ「ったく一応任務中なんだから？ボサッとしない。とりあえずさっき倒したモンスターがデカくて運べそうにないから運び屋を呼んどいた、それまで待機。いい？」

１、弟「うんわかったよ」

時間つぶしの雑談（町が壊された話）

修、アネキ「重さとしては運べなくはないが、運んでる最中にモンスターにでも襲われたら、食料と一緒に俺たちも食われちまうなハハ」

修、弟「…」(少しうつむく)

修、アネキ「あー。そんなに気を落とすなって。どんなお前でも町のみんなはお前を期待して待ってんだ。悲しい顔 させたくないだろ？」

修、弟「うん…そうだよね」

１、アネキ「おっ！きたきた。おーい」

１、弟「なんかずいぶん砂ぼこりが舞ってるみたいだね」

１、アネキ「ああ確かにね」

１、玄田（運び屋）と巨大モンスターが近づいてくる

１、巨大モンスターが近づいた瞬間。2人の過去に崩壊された町がよみがえる。

１、巨大モンスターが脇道をまっすぐ進んで自分たちの前をとおりすぎる。

１、アネキ「あいつは」

１、アネキは周りの様子を確認して、洞窟の入り口とさっき倒したモンスターを見る。

２、アネキ「まずい一旦、隠れるよ！」

２、餌に向かって走りながら弟の方を見ると

２、弟「!・・・。」

２、弟は震えて動けない。

２、アネキ「ったく」

２、弟の方に走って向かい背中を叩く

２、アネキ「しっかりしろ弟！」

２、ハッと目が覚める。

２、アネキが弟の頭を押さえて目をしっかり見る。

２、アネキ「いいか？よく聞け！」

２、顔を餌と洞窟の方に目を向けて指をさす。

２、アネキ「2人で餌を持って洞窟に向かう」

２、アネキが走り出す。

２、アネキ「以上。さあいくよ」

２、弟「うん分かった」

１、モンスター中を二人で運ぶ

１、洞窟前までたどり着いたが、思った以上に運び屋が早くこっちに来てしまい衝突

１、衝突しながらも巨大モンスター以外は洞窟内に入り身を隠す

小声でなくてもいいが声を張らない

１、アネキ「みんな無事！？」

１、弟「う、うん」

１、玄田「なんとか助かったぜ」

１、アネキ「なんだ。おっさんも何とか生きてたの。生きてるんだったらもう少しおとりになりなさいよ使えないわね」

１、玄田「そんな無茶苦茶なこと言うんじゃね。こっちとら逃げるのに必死だったてーの」

１、アネキ「フンッ さてここからどうするかが問題ね」

なぜモンスターに追いかけられているのかを聞くシーン追加

１、洞窟入り口前を右往左往している巨大モンスター

１、アネキ「まだこっちの気配に気づいてなさそうだ。今のうちに荷物を積んでおくか」

１、荷物を縛りながら作戦会議。

作戦アネキ:モンスターおびき寄せ・弟:運び屋の援護

１、アネキ「この重さで駆け抜けることは到底不可能だろう そこでだ俺がおとりになって洞窟から離れるように誘導する スキができたらおっさんと代永は草道抜けて逃げる」

１、弟「ええっ！危険すぎるよ僕も一緒に…」

１、アネキ「何言ってんだ。全身震えまくりだったじゃねーか そんな状態じゃかえって足手まといになっちまう それに運び屋が襲われたら誰が守るんだ？」

１、弟「そ、それは…」

１、玄田「俺は一人でも問題ねーけどな」

１、アネキ「そんじゃ代永を安全なとこまでしっかり運んでもらおうか 何かあったらただじゃ済ませねーけどな」

１、玄田「とんでもねえ要求だな。まあそれだけ大事にされてるってことかw羨ましい限りだよw」

弟の背中を笑いながら運び屋が叩く

１、アネキ「うるせえ！」

１、弟は少し悔しそうにしながらうつ向いている

１、アネキ「大丈夫だって。少しおびき寄せるだけだ お前たちが逃げきれたらすぐ戻るさ」

１、アネキが少し息を整える

１、アネキ「いくぜ！」

１、アネキが先に洞窟から出る

２、玄田がいつでも出れる状態で待つ

２、玄田「準備ができた。乗ってくれ！」

２、弟がアネキを気になりながら後ろに移動。

２、玄田がエンジンを入れる

１、玄田「一瞬が命取りだ！しっかりつかまれよ」

１、アネキは奥の方におびき寄せるのに成功

１、玄田「今だぜ！」

１、玄田たちは草道を抜けて無事脱出成功

１、アネキが一発ひるませる技をお見舞いしてから愛車の方を向く

１、アネキ「うまくいったみたいだな… さてあの時のケリつけさせてもらうぜ」

１、モンスターのひるみが解けて叫ぶ

１、運び屋がフォローで走ってるシーン

布をかぶって見えない状態で、弟の思考内なのでBGが真っ暗

流、弟『本当にこれでよかったんだろうか？』

途中エンジン不調になったためメンテナンスに入る

玄田「おっととエンジンの故障か？」

弟『』

アネキが剣で戦ってるシーン

弟『』

玄田「おーい弟。ちいとエンジンの調子が悪いみたいだ手伝ってくれ」

弟『』

アネキ「ぐはぁ」岩に叩きつけられるアネキ

弟『』

玄田「あのやろう返事もなしかあ」

弟『』

玄田が布をとる→弟が立ち上がり走る

玄田「・・・まじかよ。」

布を取った中には弟はいなかった。

洞窟にいた弟はアネキを守りに走って向かう

弟「うおおおおぉ」

弟が走り込んでモンスターの攻撃を防ぐ

「ぐぐぐっ」

モンスターが弟の武器を狼爪でつかみ、押し合いになる

アネキがおさえぎみの怒りで説教をしようとしたとき

アネキ「どうして戻ってきた？モンスターが怖いなら帰って待ってろって言っただろ。」

弟「ああ怖いさ体が縮こまって動けやしない…」

アネキ「だったら…」

弟「でも！モンスターよりもアネキを失うことが一番怖かった！」

アネキ「！！」

弟「いつも優しかったアネキが、いつもそばにいてくれた鳥さんが、いなくなるって考えたら苦しくて辛くて指を加えて待ってるなんでできないよ！」

アネキ「弟…」

弟「死んでほしくない！いなくなってほしくない！また一緒に冒険がしたい！だから僕は！僕の力でアネキを守るんだ。」

強く押し込まれる弟「うぐぅっ」

弟「こんなところで死なせてたまるかー」

アネキ「…へへっ ちょいとばかしお前さんをなめてたぜ そして」

モンスターをひるませる攻撃をする

アネキ「俺もなめられたもんだぜ」

アネキ「こんなところで死ぬような俺じゃねんだよ たく」

弟「アネキ…」

アネキ「そんじゃ私たち二人でぶっ倒してやろうぜ」

弟「うん」

↓

巨大狼との対決

斬ってよけるの繰り返し

最後に一発代永が決める

↓

打ち倒す

↓

記念日として岩に彫り込む 時間がなければここでEND

↓

Dの回想に戻ってEND